

学習時間・学習実態

平成29年度 学生生活実態調査(学生の学修時間及び学修行動)

調査日時：平成29年7月13日～31日

調査対象：1 学年次生105名， 2 学年次生107名， 3 学年次生106名， 4 学年次生104名
計422名

調査方法：無記名マークシート方式調査票による調査結果

回収率：1 学年次生101名(96.2%)， 2 学年次生100名(93.5%)，
3 学年次生 94名(88.7%)， 4 学年次生 94名(90.4%)
合計 389名(92.2%)

1. 講義以外の学修時間

1) 学生全体の学修時間

学生全体の学修時間(図1)は、「30分から2時間未満」が53%と最も多かった。次いで「30分未満」が、33%であった。2時間以上の学修をしている学生は、14%であった。

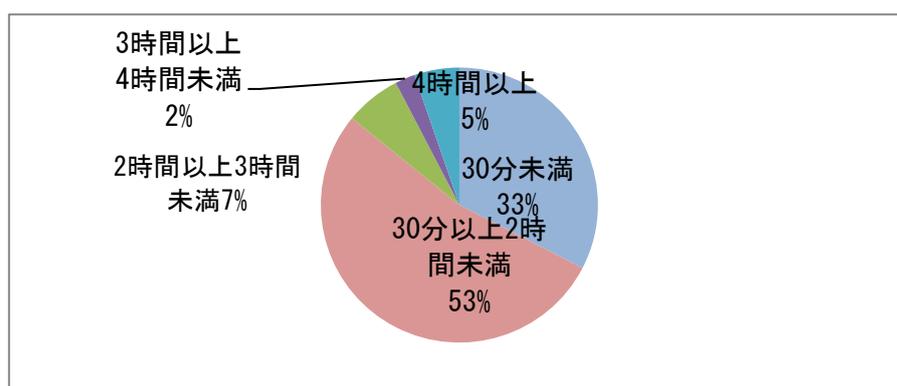


図1：学生全体の学修時間

2) 学年別学修時間

学年別にみた学修時間(図2)では、1学年次生は「30分以上2時間未満」が53.5%で、次いで「30分未満」が31.3%であった。「2時間以上」学習している学生は、全体の20%であった。2学年次生では、「30分以上2時間未満」が62.6%で、次いで「30分未満」が32.3%であった。「2時間以上」学習している学生は、全体の12%であった。3学年次生では、「30分以上2時間未満」が59.8%で、次いで「30分未満」が33.7%であった。「2時間以上」学習している学生は、全体の15%であった。4学年次生では、「30分以上2時間未満」が37.2%で、次いで「30分未満」が33%であった。「2時間以上」学習している学生は、全体の30%であった。学修時間が最も多かったのは、4学年次生であり、次いで1学年次生であった。2・3学年次生が、半数以上が「30分以上2時間未満」であり、1学

年次生よりも学修時間が取れていなかった。

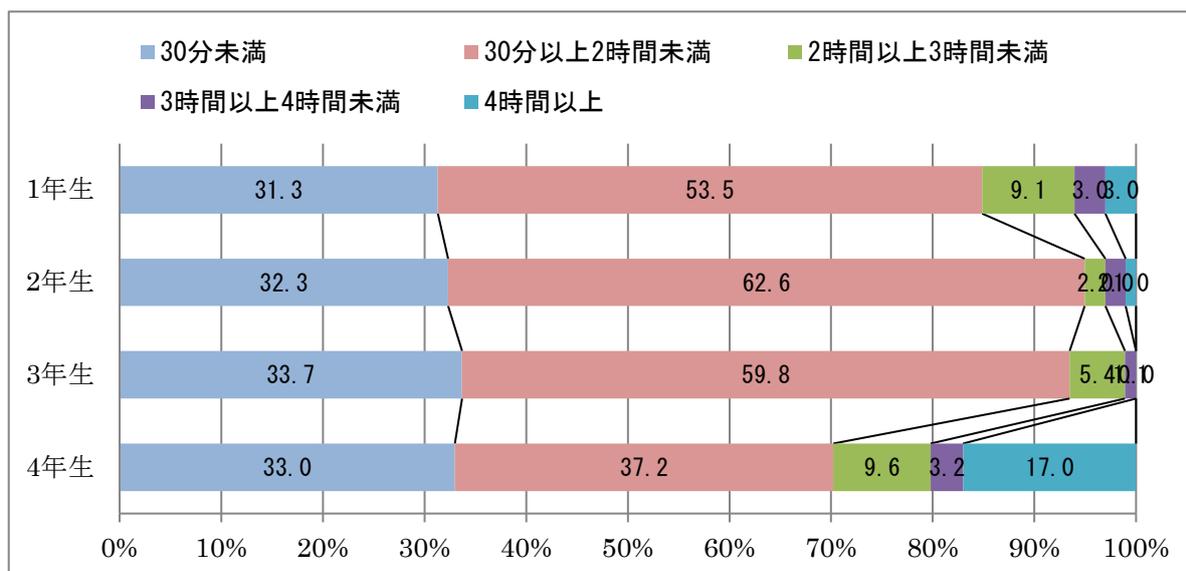


図 2 : 学年別学修時間

2. 学修行動の内容

学修行動の内容を、授業に関する「予習」「復習」および「実習記録等の整理」、「課題への取り組み」に分けて調査したところ、「予習している」(図 3)は全体の 9%であり、授業の準備をしなかった。「復習」(図 4)についても約半数の学生であり、予復習は定着していなかった。「実習記録の整理」(図 5)は、26%であったが、1～3 学年次生は講義期間であったため、4 学年次生のみであった。「課題へ取り組み」(図 6)については、80%の学生が行っていたが、20%の学生が課題に取り組んでいなかった。学修行動においては、授業の復習や課題を行っている学生が半数以上いることから、課題を提示されないと学修しない傾向にあった。授業の予習を行っている学生は全体の 9%であり、ほとんどの学生が準備状態のないまま、授業に出席していた。

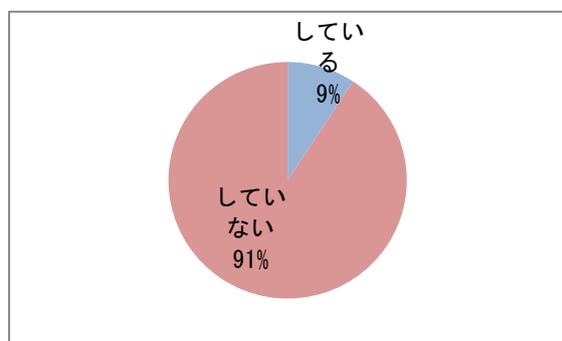


図 3 : 予習の有無

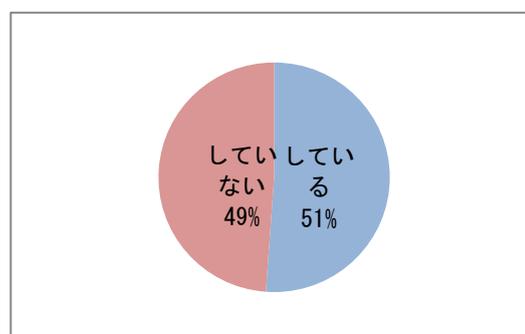


図 4 : 復習の有無

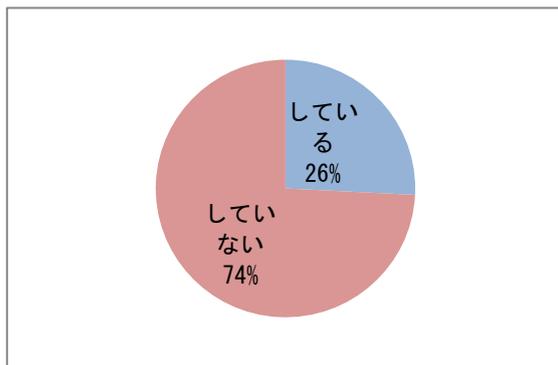


図 5 : 実習記録等の整理

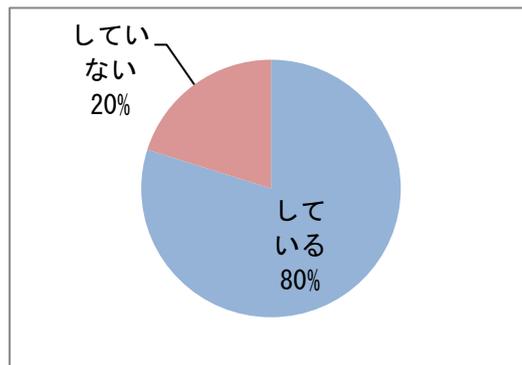


図 6 : 課題への取り組み

3. 学年別課題学習状況

学年別の課題への取り組み状態(図7)では、1学年次生が64.4%で、2学年次生76.0%、3学年次生95.6%、4学年次生81.9%であった。学年別では3学年次生はほとんどの学生が取り組んでいるが、看護専門科目の講義や演習での課題の提示が影響していた。また、4学年次生は実習終了後の国家試験対策のセミナーが開始したため、多くの学生が主体的に課題に取り組んでいた。課題に取り組んでいなかった学生が多かったのは、1学年次生が最も多く、次いで2学年次生であった。課題の提示状況が学修状況に影響していた。

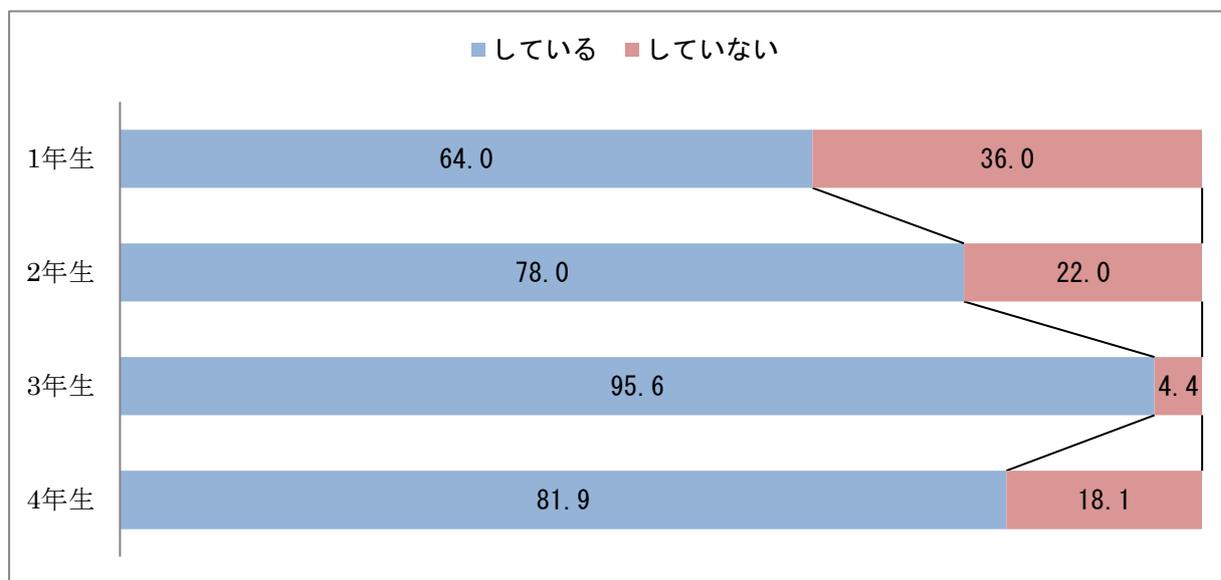


図7 : 学年別課題学習状況

4. 学生の学修状況による課題

今回の調査の結果、学生の8割が自らの学修時間を30分未満、もしくは30分以上2時間未満と答えていたが、各科目で指定された課題に関連した自己学修は実行できていた。また、授業の準備学修としての予習をしている学生はほとんどいない状況であり、学生全体が授業の準備の整わない状況で授業に出席していた。

しかし、学生は課題があればそれを達成しようとすることから、今後は、各単元の具体的な準備学修内容を示すとともに、学修時間の目安を示していくことが、学修行動の促進につながると考えられる。また、授業科目の学修段階や順序等の体系性を明示し、学生が自身で学修成果を客観的に観察できる学修ポートフォリオによる自己評価システムも確立していく必要がある。

さらに、本調査の結果を受けて、教員の教授方法の見直しや課題の提示方法の見直し等も含めて、教員による積極的な教育の質保証に向けたPDCAサイクルの展開が必要である。

5. 対策

前述の学生の学修状況により、以下の対策について実行する。

- ・ eポートフォリオの適切な運用
- ・ 学修成果に向けたシラバスの改善
- ・ 教育的介入のPDCAサイクルの展開